

〔研究ノート〕

シュムペーターの資本主義観

池 本 正 純

ま え が き

小論の目的はシュムペーターの理論的支柱とも言うべき『経済発展の理論』(Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, 1912年, 第2版, 1926年。中山伊知郎・東畑精一訳 1937年, 中山・東畑・塩野谷裕一訳1977年)の意図が単に経済発展の諸要因の分析にあるというよりも、むしろ彼自身の資本主義の理念を提示することにあつた、ということを確認するとともに、その資本主義観がどのような特質を備えているかを明らかにすることにある。(なお引用文はすべて中山・東畑・塩野谷訳の文庫版に依つた。)

1. 問 題 意 識

現代の経済体制論がもはや従来の「資本主義」か「社会主義」という単純な二者択一的な問題設定の枠組みからは、はみ出しているという認識はいよいよ強まりつつあるように思われる。勿論その背後には多様な「資本主義」と多様な「社会主義」とが現に存在するという歴史的事実から、否定なく反省を迫られるといった事情があろう。しかしそれ以上に、理論的見地からも従来の「純粋な資本主義」とか「市場経済」とかさらには「企業」といったごく当り前

目 次

〔研究ノート〕

シュムペーターの資本主義観……………池本正純…………(1)

〔資料ノート〕

社研受入図書資料一覧……………(9)

編集後記……………(10)

の如く用いられてきた概念に対して疑問が投げかけられ、経済学そのものを根底から問い直すほどの反省がなされつつあるという状況がある。

例えば「純粋な資本主義」に対する疑義としては「現実の資本主義の歴史は、一貫して、混合的な経済の歴史である」（正村公宏「経済体制論序説」、専修経済学論集第12巻第1号）といった指摘があげられる。

また「市場経済」については、従来、資源の効率的配分をもたらす資本主義に固有な社会的機構として捉えられ、それを内生化していない計画経済は必然的に非効率な体制にならざるを得ない、と言われてきた。しかし筆者自身の考えによれば、資本主義における市場は最終需要者とメーカーとの間に抽象的にタダで存在しているわけではなく、具体的には「商業」というサービス産業の形で受肉している。いってみれば、市場経済は商業部門抜きでは存在しえないものであり、市場を機能させるためにそれだけのコストをかけているのである。完全情報（確実性）を前提にした経済モデルに引きつけて資本主義を解釈し、短絡的に社会主義との比較を行うことは許されない。資本主義を市場経済制度として特徴づけることは肯けるが、それと同時に商業抜きで（コストなし）で市場経済の具体性はあり得ないことも認識すべきであろう。問題なのは市場制度があるや否やということではなく、どれだけ効率的な流通組織が形成されるかという程度の問題になる。

また「企業」概念にしても、従来の原子論的な質点として企業を捉えるのではなく、危険や不確実性の伴う現実の中で直面せざるを得ない市場機能の不完全性を、止揚するための組織原理として企業を捉え直そうとする研究が進行している。市場機能が取引コストのために十分効率的に働かないような領域（例えば労働市場）のもとでは、市場的交換を集団内の交換に止揚することによって、組織的行動の利点が生まれる。それが企業組織なのであり、企業内のヒエラルキーは情報コストを節減するためのものとして導入される、と解釈できる。かくして市場も組織も広い意味での交換システムのサブシステムとして捉えられ、両者の組み合わせ如何が経済体制の質を決める規準となる（この企業概念の検討に関しては、K. J. Arrow, *The Limits of Organization*, 1974年、村上泰亮訳『組織の限界』1976年、ならびに今井賢一ほか「内部組織の経済学」『経済セミナー』1977年5～12月号を参照されたい）。

このように経済体制に関する基本的な概念の洗い直しが進行しつつある状況のもとで、あらためて資本主義とは何かを問い直す作業の一環として、シュムペーターの資本主義観を取り上げるのもあなたがち意義なしとしない。というのは、ややもすると、シュムペーターの理論は経済発展の要因や形態を説明することを最終目的にしていると受けとめられがちな傾向があるからである。もしそうであるとするなら、それはシュムペーターの意図に反することになる。彼の（とくにその主著『経済発展の理論』における）意図は先ず何よりも資本主義とは何であ

るかという彼独自の理念を提示することにあつた。『発展の理論』は発展現象を具体的に説明する分析の書であるというよりも資本主義の本質を問う理念の書である。発展現象に関するいくつかの特徴がそこに挙げられてはいても、それらはすべて最終的に、彼独自の資本主義観を説明するための要件として体系づけられているのである。

それ故、シュムペーターを解釈するのに、彼の立場は経済発展の要因として企業者活動とか技術革新（シュムペーターの新結合を技術革新として捉えること自体狭い解釈なのであるが）を重視する考え方であると見なし、それは歴史的にいついつの時代にあてはまると、解釈したり、あるいは、彼は金融市場の中でもとりわけ銀行資金市場の機能を強調する立場であるとし、それがあてはまる例はドイツに見られる、と解釈したりする仕方はあまり意味がない。新結合とか信用創造とかはいづれも彼の考える資本主義の本質の説明にとって必要欠くべからざる手段となっていこそすれ、それらは独立しては意味がなく、彼の体系的説明の中に位置づけられて初めて意味をもつ。彼の資本主義の理念はそれらの条件の一つが欠けても全体としての意味が崩れるという一枚岩の体系となっているからである。彼の資本主義理念の内容の独自性もさることながら、理念を構成する際の透徹した一貫性においても稀に見る独自性を備えている。

2. 従来の経済理論と発展現象

シュムペーターはその処女作『理論経済学の本質と主要内容』（1908年）において明らかにした如く（それは『経済発展の理論』の第1章に要約的に再述されているが）、従来の経済理論は経済体系の均衡状態を描く静態的理論であると見なしている。均衡状態においては経済主体は経験的に与えられた与件に従い、同じく経験的に与えられた様式（生産方法、消費パターン）に従って行動するゆえに自動的な規則性が支配する。彼はそのような状態を定常的循環と名づける。完全競争的な市場が仮定されているので利潤はなく、したがって利子も存在しない。そこに変化がないわけではないが、あるとしても与件の変化に追隨した連続的な変化のみである。

このような外生的攪乱に対する経済体系の適応というフレームワークしかもたない従来の経済理論によっては、資本主義に固有な発展現象を説明することは困難に陥るとシュムペーターは考える。勿論それまで、経済発展の原因として資本および人口の増加、消費者の嗜好変化、技術進歩といったものが指摘されてはきたが、それは飽くまで外生的攪乱（経済体系外の与件変化）として片づけられてしまっており、その限り、発展を適合的かつ連続的なプロセスとしてしか把握していない。しかし実際的に重要となる発展はむしろ飛躍を含んでおり非連続な形で生じている（景気変動を伴う発展）。とりわけ、経済行動自身が与件そのものを急激に変

えていくような可能性がある場合には与件への適応のみを唱える従来の経済理論は何ら役に立たなくなる。

シュムペーターによると、資本主義に固有な発展とはまさにこの経済体系の内部から自らの与件を変えていくプロセスに他ならない。否、むしろこのダイナミックなプロセスこそが資本主義の本質なのだ。与件の変化によって生じる古い均衡点から新しい均衡点への「微分的な」歩みによる適合的プロセスによっては「連続的成長」は描き得ても、経済体系の内部から噴出する発展の動因と、特有な非連続的發展現象を捉えられない。「郵便馬車をいくら連続的に加えても、それによってけっして鉄道をうることはできない」((上)P.180)。資本主義の固有な相を把握するためには、経済理論は発展を外生的与件の変化に依存せしめるのではなく、それを内生化するフレームワークをもたなければならない。技術進歩という現象もその観点から捉え直す必要がある。

3. 新結合と企業者

さて、経済体系の自発的、非連続的变化(均衡状態の破壊)は具体的には(商業活動をも含めた)産業活動の場面に出現する。「経済における革新は、新しい欲望がまず消費者の間に自発的に現われ、その圧力によって生産機構の方向が変えられるというふうにおこなわれるのではなく……むしろ新しい欲望が生産の側から消費者に教え込まれ、したがってイニシアティブは生産の側にあるというふうにおこなわれるのがつねである」((上)P.181)。生産とは利用可能な諸資源の給合に他ならないが、その結合の仕方を新たに変更するところ(新結合の遂行)に発展の内実がある。つまり、新商品の開発、新しい生産方法の導入、新しい市場の開拓、原材料の新しい供給源の獲得、新しい産業組織の形成などである。(新結合という概念は単なる技術革新よりも広い概念であることに注意されたい、この概念は後の書物では「新軌軸」、「創造的破壊」という表現で引きつがれる。

これらの新結合を遂行する主体が企業者(Unternehmer, entrepreneur)である。そして注意すべきことであるが、この新結合を遂行する限りにおいて企業者でありうるのだ。つまり、企業者という概念はその特殊な機能に結びつけられているのであり、一定の制度内の職業上の種類や地位を示すものではない。具体的には企業者の機能は他の種類の活動(資本家、地主、商人、工場長、技術者、発明家、etc)と結びついて現われざるを得ない。しかしそれらの結びつきのいずれも必然的、普遍的なものではない。とくに企業者と資本家とを制度のうえでではなく機能のうえで明別していることに注意されたい。所有しているということは企業者の必須の条件ではない。また、一たび創造された企業を単に日常的な管理(ルーティン・ワーク)として経営していくようになると単なる業主でこそあれ、もはや企業者ではなくなるのだ。

企業者の特性は人間の他の能力と同様きわめて稀にしか存在しないような分布に従っているとシュムペーターは言う。ではどのような意味で新結合の遂行は特殊な機能であり、企業者は特別な類型であるのか。我々は規則的に繰り返される日常的問題に関してはそれを慣習的形式において認識処理しており、たいていは自動的にその解決に到達する。習慣によって培ったこのような思考節約的自動処理は経済的日常生活にも勿論生きている。しかしいったん慣行の軌道の外へ出ようとする際にはつねに抵抗と困難がつきまとう。「彼はすみずみまで十分に分っている循環の中では潮流にしたがって泳ぐが、彼がその軌道を変更しようとするときには、潮流に逆って泳ぐことになる。以前は支柱であったものが、いまや障害となる。熟知していた与件がいまや未知のものとなる。常軌の活動の限界にきたときには、多くの人々は立往生し、そうでないものもまったくばらばらの程度に進むにすぎない」(上)P.210 傍点原文のまま。以下同様)。そこには指導者活動が威力を発揮する余地が生まれる。

指導者の課題は新しい可能性に対して存在するが、しかし指導者自身は新しい可能性を発見したり、創造したりする必要はない。むしろ新しい可能性は知識としては日常的に広く知られているといった方が良くらいである。「ただこれらの可能性は死んだものである。指導者機能とはこれらのものを生きたもの、実在的なものにし、これを遂行することである」(上)P.229。

この指導者類型を特徴づけるものとしてシュムペーターは事物を見る特殊な方法(知力というよりもむしろ確固たる事物をつかみ、その真相を見る意志と力)とか、ひとりで衆に先んじて進み、不確定なことや抵抗のあることを反対理由と感ぜない能力とか、さらに人を服従させる力とかを挙げている。企業者の機能はまさにこの指導者の機能と不可分に結びついているのである。単なる発明家あるいは技術者の機能と、企業者の機能が一致しないことはここに明白となろう。

企業者とは慣行の軌道から脱却することによつて様々な抵抗を克服し、新結合を遂行するところの経済社会の指導者であり、経済発展の中核的担い手なのである。その意味で資本主義社会の生命力の根源となる。

4. 資本の本質

ところで企業者による新結合の遂行のためには、均衡のとれた正常な循環を前提にする限り、必要とする生産手段をなんらかの形で旧結合から奪い取ってこななければならない。つまり発展とは新結合の遂行であると同時に国民経済における生産手段ストックの転用であるとも言える。注意が必要なのは、ここには通例、経済発展の説明に用いられる資本蓄積(貯蓄とか節欲)の効果が捨象されていることである。これはシュムペーターの考える資本主義的發展というものを純粋な相に於て捉えるために採った重大なレトリックである。つまり、彼のいう発展

は富の蓄積を前提にしなくても可能なのである。否、むしろこのような発展こそが資本主義に固有な発展の姿なのだと考える。富の蓄積は発展の前提条件というよりむしろ結果にすぎない。それでは一体如何にして生産手段ストックは他の用途から吸引され、新しき生産方法が実現されるのか。

結論的に言うとそれは、銀行の信用創造によって可能となる。新たな貨幣の創造を媒介にして企業者は財、サービスへの命令権を獲得し、旧結合に用いられていた生産手段ストックを奪取する。つまり、新しい購買力の注入によって国民経済の生産的資源の数量は増加するわけではないので、それらの価格は上昇する。その結果旧来の購買力は圧縮され、その犠牲の上に立って新しい購買力は生産的資源を吸引する。既存の生産資源はかくて新しい使用方法のものに配分されることになる。銀行によるこの購買力の創造こそが新結合の遂行のための、そして資本主義的發展を本質的に説明するところの典型的な金融の源泉となる。

貯蓄に基く投資が本質的には重要でなくむしろ発展の結果にすぎないとするならば「このような方法がない限り、私有財産制度と経済主体の自己決定権とが認められている流通経済では、発展は不可能とはならないとしても、極端に困難となる」((上)P. 274)。信用供与は企業者をしてこの束縛から解放せしめる唯一の途なのである。銀行は単に購買力という商品の仲介商人であるのではなく、何よりもこの商品の生産者である。そして新結合を遂行する全権能を与えところの国民経済の監督者である。信用創造はそれ自身發展の一つの現象であるわけであるがまたそこに資本の本質とも言うべき機能が横たわっている。

伝統的経済理論においては資本は実物的な生産手段ストックをさすものとされているが、シムペーターはそれに異を唱える。「資本とは、企業者が彼の必要とする具体的財貨を自分の支配下におくことができるようにする挺子にほかならず、また新しい目的のために財貨を処分する手段、あるいは生産に新しい方向を指令する手段にほかならない」((上)P. 291)。資本は財貨調達的手段なのであり、獲得された財貨とは機能が異なる。資本は企業者と財貨との間に立ち、両者を架橋する。それは技術的、物理的な生産に直接入り込み加工の対象となるものではなく、技術的生産を開始する以前に解決されるべき課題を遂行する。

資本の本質はある企業者の私的勢力範囲から、他のそれへと生産手段の移転を遂行せしめるところの購買力機能に存在する。銀行はその購買力を供与するところの「資本家」の典型である。そして、新結合のために必要な財貨が購買力の介入(資本の作用)によって旧来の用途から引き抜かれ、新たな發展の契機が生み出されるところに「資本主義的経済形態」の特質がある、とシムペーターは考える。

生産手段の転用が共同体の全員一致によって、あるいは集権的機関の命令によって行われるような経済においては資本の作用は存在せず、従ってそれは非資本主義的形態だということに

なる。

5. シュムペーター理論の特徴

シュムペーター理論のフレームワークは、伝統的経済学と対比したとき、とくに際だった対照をなす。まず第1に、シュムペーターにおいて市場制度は資本主義にとって必要条件ではあっても十分条件ではない。従来の経済理論では、生産のあり方（生産物の種類や数量）を決定し、経済社会を最終的に支配していく立場にあるのは、消費者（の嗜好）であった。つまり消費者主権である。企業は市場を通じて得られる情報（価格体系）をもとに、もっとも利潤の高い生産物と生産方法を採用することによって、与えられた環境（需要構造）に適応する。それが企業間の競争を通じて社会的に最も効率的な産業構造をもたらすことになる。経済発展のプロセスの中に消費パターンの変化が指摘されることはあっても、イニシャティブは飽くまで消費者の嗜好の変化に求められた。しかしシュムペーターはそれを認めない。新しい商品の開発は市場からは決して指令されない。潜在的需要を嗅ぎわけ開発していくのは企業者の創造努力なのである。消費者の役割はせいぜいその選択行動を通じて企業者の創造の結果を（潜在的需要に適ったものであるかどうか）最終的に利潤に反映するという形で間接的にチェックするにすぎない。発展の相において資本主義を捉える限り、イニシャティブは飽くまでも企業者にある。消費パターン所与のもとで利潤追求を図るのではなく、新商品の開発（消費パターンそのものの変革）を通じた利潤追求を意図するところに企業者活動の本質がある。

第2に、従来の静態的経済理論のフレームワークのもとでは、発展を経済体系外の攪乱要因に帰せしめようとするが、シュムペーターはそれを内生化し、資本主義経済に自発的な現象として捉える。勿論、資本蓄積に関しては、それが経済主体の節欲・待忍という貯蓄行動に根ざしているものである以上、外生的要因であると厳密には言い難いが、シュムペーターにおいては蓄積は発展の前提としてよりも発展の結果と見なされており、資本主義的發展にとっては非本質的要因となる。そこで、両者の違いを整理し明確化するのに次のような比喩が役立つであろう。伝統的理論は「生産関数」中の説明変数のうちでもとりわけ資本（実物的生産手段ストック）に注目し、その蓄積（連続的・量的拡大）に発展現象を見い出しているのに対し、シュムペーターは「生産関数」そのものの変革に資本主義發展の根本現象を見い出しているのである。「生産関数」は企業者にとって所与のものではなく、むしろそれを革新していくことにこそ企業者の機能が存在する。

第3に、資本概念に違いがある。伝統的理論においては実物的財貨としての生産手段ストックをさすが、シュムペーターでは旧来の需要構造と生産方法に適合していたそれまでの生産手段ストックを編成し直すために挺子となる購買力をさす。つまり「資本とはいつでも企業者の

自由に委ねられる貨幣およびその他の支払手段の金額である」((上)P.304)。資本市場とは購買力の市場であり、資本家とは、人々に対して購買力を供与しうる人である。とくに発展の成果が全く存在しない静態的経済の内から新結合を遂行する場合には、資本は信用支払い手段のみからなる。他のだれも貯蓄することなしに信用貨幣の媒介を通じて生産財を調達しようというのが資本主義に特有な金融現象なのである。

このようにシュムペーターの資本概念はすぐれて貨幣的 (not real but monetary) である。静態的循環にとどまり続ける限りは貨幣の代わりにそれに対応する財貨だけを考え、貨幣を単なるヴェールとして無視することも可能であるが、「しかし、動態においては、財貨をその静態的軌道へ導き入れる本質機能が貨幣に付与されざる」を得ない。

ところで、資本とは何かという問いは当然資本主義とは何かという問いに密接に係わりあう。シュムペーターの資本概念に依れば企業者によって生産手段が所有されているかどうかというのは問題ではなく、むしろ、新たな購買力(貨幣)を創出するところの信用組織が備わっているかどうかということが問題となる。信用市場は「いわば資本主義経済の中央本部であり、ここから各部門に命令が発せられるのであって、ここで論議されここで決定されることは、つねにその最も内面的な本質において次の発展計画を確定することである。あらゆる種類の信用要求がここに現われ、あらゆる種類の経済的企図がここで始めて他のものと関連づけられ、ここで実現を競い合うことになる」((上)P.361)。

6. 結 び

シュムペーター理論(『経済発展の理論』)は以上の概観からもわかるように3つの中核的概念によつて構成されている。つまり企業者機能、新結合、信用創造である。しかしこれらの概念は独立しては意味がなく、3つのものがあいまって統一した形になってはじめて意味をもつ。この三位一体によつてシュムペーターが示そうとしたのは、勿論経済発展の諸要因を挙げつらうことではなく、資本主義とは何かという問いに対する彼自身の解答である。資本主義とは何かを考えるとときに発展の問題を抜きには論じられないという点に書名の経緯があるのであり、またそこに彼の資本主義観の独自性が現われている。

資本主義の経済過程は、均衡への収斂ではなく、発展と変動をその本性とする。しかも彼が追求したのは変動の諸要因ではなく、変動の機構であった。発展と変動を外から偶然に与えられる攪乱要因に結びつけようとする限り、資本主義の本質は把握できない。資本主義とは発展と変動の機構そのものであるのだから。

上に挙げた3つの概念はこの発展の機構を構成する動輪でありそれらは三位一体となって初めて活力を得る。新結合の遂行を資本主義の「精霊」とすれば、それを担うべく現世に下り給

うた「寵児」が企業者であり、それに血を通わせしめ給う「創造主」が銀行信用なのである。

もう一度繰り返そう、シュムペーターの意図は、彼独自の資本主義の理念を、資本主義とは何かということに関する彼の信念を、うち出すことにあった。しかし、幸か不幸かシュムペーターを教祖として奉る信者は意外に少ない。否それどころか、彼の理論が三位一体の「教え」であることさえあまり意識されてはいないように思われる。

〔資料ノート〕

社研受入図書資料一覧

〈寄 贈〉

日本経済新聞社『国会便覧 52年』

岩手県立図書館『増加図書目録 昭和51年』

大曲昌徳『日本のための社会学』中央公論事業出版

農林中金調査部『農林金融統計 1977年』

同 『農林金融の実情 1977年』

清水川・柴沼・近江谷著『経済分析の理論と方法』世界書院

公正取引協会『私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律』

同 『懸賞による景品類の提供に関する事項の制限等の告示及び運用基準』

食品産業センター『昭和51年度版 食品産業総合統計年報』

専修大学図書館『逐次刊行物目録（和文）1976』

同 『逐次刊行物目録（欧文・分類目録）1976』

同 『逐次刊行物目録（欧文・誌名目録）1976』

同 『産業商業会計関係図書目録（和文）1976』

同 『 同 （欧文）1976』

尼崎市『尼崎市史』第6巻（史料編Ⅲ）

Kyojiro Someya "An Introduction to Flow of Funds Accounting" Waseda Univ.

R. J. Barnet & R. E. Müller "The Power of the Multinational Corporations" Simon & Schuster.

Y. Kurabayashi "Studies in National Economic Accounting" Kinokuniya.

（山田一郎氏寄贈）

『社会科学大事典』第1巻—第20巻 鹿島研究所出版会